



最近の厚生労働省の発表によると、日本人の平均寿命がさらに伸び、男性79・59歳（世界第5位）女性86・44歳（世界第1位）合わせて83歳代と過去最高値を示し、世界一の長寿国を維持している。100歳以上の長寿者が4万人を突破し、われわれの周囲にも100歳以上の方々が珍しくなくなってきた感がある。遺伝子も含めた長寿の研究も盛んに行われ、不老不死を求めた秀吉ではないが、長寿を達成するための条件については学術的で

長寿『虚』国 日本

情報広報部副部長

橋本 洋一

あるかどうかを問わず、活発な議論がなされてきた。今春神戸で開催された高齢者を研究対象にしたある学会でも100歳以上の長寿者の合併症の内訳を比較検討し、高血圧が50%前後あるのに対して、糖尿病が10%未満と少なく、他の文献同様、4疾病の1つである糖尿病が平均寿命に大きく関与している可能性が示唆された。さらに単に長寿であることに加えて、生活の質（QOL: Quality of Life）も同様に議論されてきた。

しかし、家族と同居していた113歳の男性が実際には30年以上も前に死亡していたらしいとの報道を皮切りに日本全国で最高長寿者を含む100歳以上の所在不明者が次から次と続出し、数百名に迫る勢いにあるとのニュースに背筋が寒くなる思いがする。長寿世界一という地位の信頼性も揺らぎ始めているが、それ以上に問題なのは、同居しているはずの家族が父母、祖父母の生存の有無を知らないなどという先進国で法治国家の社会にあるまじき事態である。

さらに、社会の最小単位である家族すらも崩壊の危機に立っていることを実感させる事件が後を絶たない。2人の幼子を自宅に残して、食事を与えないとやがて生命の危機に陥ることを実感していたにもかかわらず、食事を与えず餓死させてしまった若い母親が逮捕されたが、こうした事件が後を絶たない背景に、人間関係の希薄さが大きく影を落としていることは疑いもない事実である。ここまで、非人間的な状況が蔓延してきた事態に対して取れる有効な手段は何なのだろうかと自問自答しても、

すぐにその解決策は見つからないが、今まで歩んできた人類の道程を見つめ直すところから始めるしかないのかもしれない。

地球上に出現した人類が集団定住生活を始めて約1万年位の時間が経過したらしいが、その成立要素におじいちゃんならぬ『おばあちゃん仮説』がある。子供の育て方を知らない母親に子育て方を伝授し、赤ちゃんの養育に疲れている若い母親に代わって、上の子供達の面倒をみてくれる存在でもある「頼もしいおばあちゃん」の存在である。この『おばあちゃん仮説』はかなりのところまで実証されているらしいが、私の幼年時代にはおばあちゃん存在が大きかった思い出がある。過去1万年もの長い期間持続してきた、この「おばあちゃん」のかかわりが昔のようにできる時代に時計の針を逆に戻す必要があるのではないだろうか。

鳩山首相の後を受けて就任した菅首相は「国民が不幸になる要素を少なくするのが政治の役割である」と所信表明演説で述べられたが、自分自身にとつて都合のいい合理主義が不幸の要素になっていく側面を直視し、対策を講じないと900兆円を超える借金同様、はかり知れない不幸の山が重荷になるおそれがある。われわれ医療人は心身の健康を維持促進する立場から積極的にこの不幸の重荷と対峙していくことが求められている。